

# 進化と退化の神話

—The Water-Babies 論—

安 藤 聡

## 要 旨

チャールズ・キングズリーの童話作家としての代表作『水の子』は矛盾と偏見に満ちた陳腐な教訓的作品であるにもかかわらず、英国児童文学史上では一つの「伝統」を確立した作品として、19世紀後半の「児童文学黄金時代」を代表する作品と見なされている。この作品の評価は物語としての完成度ではなく、当時英国を揺るがせていたダーウィン進化論と伝統的信仰を止揚させるべく、魂の進化と退化という独自の「進化論」を作り上げそれを「神話化」している点に対してであろう。キングズリー自身の信仰の特異性も含めて、『水の子』とその時代背景の関連を考察することが本稿の主な目的である。

キーワード： Charles Kingsley, *The Water-Babies*, 児童文学黄金時代, 進化論, キリスト教的社会主義, F. D. Maurice

Charles Kingsley (1819–75) は *The Water-Babies* (1863)<sup>1</sup> 出版以前から聖職者、社会改良家、歴史学者、小説家として既に名声を得ていた。デヴォン州はダートムーアの南端に近い小村ホウンで牧師の息子として生まれた彼は父親の仕事の関係で方々の教区を転々としたのちに再びデヴォンに戻り、北海岸の断崖にある美しい漁村クロヴェリーで幸福な少年時代を過ごす。その後彼はブリストル近郊のクリフトンのグラマー・スクールを経てコーンウォール州ヘルストンにある詩人 Coleridge の息子 Darwent Coleridge が校長を務めるグラマー・スクールに学ぶ。ロンドン大学キングズ・コレッジ、ケインブリッジ大学モードリ

ン・コレッジで放蕩な学生生活を送り一度信仰を捨てた Kingsley は、Humphrey Carpenter によればその後放蕩な生活に対する罪悪感から再び信仰を取り戻し<sup>2</sup>、1942年に牧師補としてハンプシャー州エヴァーズリー教会に赴任、のちに教区牧師となる。その頃から F. D. Maurice (1805-72) の思想に影響を受けてキリスト教社会主義に傾倒し、‘Parson Lot’ の筆名で社会改良に関する論説文を執筆する。1850年には大人向け小説としてこの主題を扱った *Yeast, Alton Locke* の二作品を出版、1855年にはエリザベス朝イングランドを舞台とした冒険小説 *Westward Ho!* を発表する。この作品はそのタイトルがデヴォン北部の町の名前になる程に人気を博した。この頃を境に大人向け小説から児童文学に転向し、翌年にはギリシア神話の再話 *The Heroes* を出版する。また1860年から9年間に亘ってケインブリッジで近代史の欽定講座の教授を務めた。

このような名声の一方で彼は常に神経症に悩まされ、しばしば療養と称してひとりデヴォンに帰っていた。結果的に彼の代表作となった *The Water-Babies* は1862年から翌年にかけて *Macmillan's Magazine* に連載されたものであったが、Carpenterによればこの作品は作者が大人向け小説家として行き詰まっていた時期に神経症に起因する不安、絶望の中で書かれ、この執筆が Kingsley の精神から重荷を取り除いたという<sup>3</sup>。また Kingsley 夫人によればこの作品は彼が末の息子 Grenville Arthur のために書いたものであり、第1章はある春の日の朝食後にわずか半時間で書き上げられたものであるらしい<sup>4</sup>。夫人が同じ箇所で指摘しているとおり、この物語は熟考して組み立てられたものと言うよりは靈感によって出来上がったものである。この作品についてしばしば指摘される構成上の甘さや細かな矛盾点<sup>5</sup>、またそれにも関わらず読者を強く惹きつける物語の力などは、閃きによって勢いを持って書かれた作品に特有のものであろう。このような意味において、この作品は George MacDonald の諸作品と好対照をなす。

## 1. Kingsley の異端性

牧師、説教家としての名声にも関わらず、Kingsley のキリスト教信仰は明らかに異端に属する。彼の思想に最も影響を与えた Maurice のキリスト教社会主義は資本主義のシステムの下で搾取されている労働者の惨状を救済することを目指し、その戦闘的姿勢から「筋肉的キリスト教」(Muscular Christianity) と揶揄された。しかしながら1855年には同じく Maurice に思想的影響を受けた Thomas Hughes (1822-96) に宛てた手紙の中で彼は、世界はキリスト教社会主義が考えているほど理想的な方向には進まないという事実気づいたこと、また建設を始めるためにはそれに先駆けて破壊が必要であることを述べている<sup>6</sup>。この頃を境に Kingsley の思想は保守的で同時に破壊的な方向に傾倒して行く。

彼はまた Charles Darwin (1809–82) を積極的に支持していたのみならず、*The Water-Babies* において Darwinism を伝統的キリスト教信仰と止揚させることを試みている。このことも当時の聖職者の姿勢としてはむしろ異例と言えよう。神によって創られたものとされていた「種」が自然淘汰の結果であることを論証した Darwin の進化論は当時の宗教界を動揺させるに十分であった。既に指摘したとおりこの「歴史的危機」としての進化論が 1860 年代の英国における「ファンタジー黄金時代」の重要な要因の一つとなっていて、伝統的世界観が覆された時代であって生の表現は悲観的、内省的な方向に向かい、そのことが空想的要素を多く含む文学作品を多く生み出したのである<sup>7</sup>。Kingsley, MacDonald, Lewis Carroll の三者はそれぞれの方法でこの歴史的危機に対して何らかの反応を示しているが、この中で Kingsley だけが積極的、肯定的に進化論を受け入れている。Colin Manlove は Kingsley と MacDonald を比較して論じる文脈で、MacDonald が Darwin, T. H. Huxley らの科学的発見を真の洞察と矛盾するものとして排除していたのに対して Kingsley はそれを自分のキリスト教信仰と調和させる必要性を強く感じていたという事実を指摘している<sup>8</sup>。

*The Water-Babies* は Gillian Beer の言葉を借りれば「注目すべき洞察をもって Darwin の理論を絶滅、退化、反復、発達というイメージの中で神話化している」<sup>9</sup>。Kingsley 自身はこの作品について、「すべての物理的自然の下に奇跡的、神的要素が存在するというを大人にも子供にも理解させることを試み」るためにこの作品を執筆したと、Maurice 宛の書簡で述べている<sup>10</sup>。一方で Carpenter はこの作品が「時代が抱える問題についての議論を物語という形式で展開している点では成功している」<sup>11</sup>が、「矛盾、知的混乱に満ちていて作品自体がどこにも到達していないという意味においては失敗作である」<sup>12</sup>と論じている。矛盾の一例を挙げれば物語の半ばで語り手は「優れた物語には．．．如何なる教訓もあってはならない」と断言している (184) にもかかわらず、最終章の後には「教訓」がおよそ 2 頁に亘って添えられていて、そこで語り手は「(この物語には) 37 乃至 39 の学ぶべき教訓が含まれている」と述べている (328)。また終始語り手が物語に介入してきて説教を述べるという点でも、純粋な児童文学としては失敗していると判断せざるを得ない。にもかかわらずこの作品が現在もなお古典として読み継がれ、Kingsley の代表作と見なされ、また児童文学史上でも重要な作品と考えられている理由は、この作品が持つ独特の勢い、児童文学として新たな方向性を開いたことの他に、Darwinism の物語化、神話化にある程度成功していることが考えられよう。

この作品における妖精の導入もまた二通りの意味で異端的要素と言えよう。一つはイングランド国教会の牧師である作者が積極的に妖精の存在を (たとえそれが自然現象を具現化した隠喩的なそれであったとしても) 肯定しているという点で、もう一つはその後多くの類似的作品が書かれているものの創作童話に妖精を採り入れたのは「前例のない」「完全

な発明」であった<sup>13</sup> という点である。しかもその妖精の扱い方は想像力に訴える MacDonald のそれとは対照的に、「生命や蒸気が目に見えなくとも存在するのと同様」「この世に存在する最もすばらしいものは誰の目にも見えない」(59-60) というように、あくまでも現実世界の文脈と折り合いをつけながら提示されるのである。

## 2. 痛みとしての冷水

「冷水」はこの作品の中心的なモチーフの一つである。それは常に「洗礼」「浄化」というイメージと結びつく。Carpenter は *The Water-Babies* を肉体と冷水についての物語と考えている<sup>14</sup>。虐待され過酷な労働を強いられているノース・ヨークシャーの幼い煙突掃除少年 Tom はその境遇を自分の人生として受け入れていたが、Harthover 邸の煙突を掃除中に美少女 Ellie の寝室に迷い込んだことから煤煙に汚れた自分の外見を恥じるようになる (26)。邸から逃げ出した Tom は Vendale の谷間の小さな学校に辿り着くが、そこで彼の汚れた姿を見て少女たちは泣き少年たちは笑い (52)、このことによってさらに Tom は清潔になりたいという願望を強める。彼は身体を清めるため近くの小川に入ってそのまま 10 分の 1 ほどの大きさの (ここで語り手は彼の身長を 3.87902 インチと明言し、数字の具体性によって話に信憑性を持たせようとしている) 両生類「水の子」に生まれ変わる (67)。このことは現実世界の文脈で言い換えればこの主人公が水浴中に溺死したということであり、より宗教的なレベルではこの際に彼の身体の汚れが冷水によって洗い流され、神の国 (という言葉は用いられていないが) に迎え入れられたということである。汚れを落として水の子になった Tom を語り手は「本当の Tom が内側から洗い出された」と述べている (76) が、Kingsley の児童観は Blake のそれに通底すると考えて良からう。Tom は大人になって煙突掃除の親方になり、自分が今されているように弟子の少年たちを虐待し殴打する日を夢に見ている (3) が、彼の人格がこのように屈折しているのも彼の外面的不浄さと同様に虐待され酷使されている環境の結果であり、根源的な原罪によるものではないという考えがここに読みとれる。Kingsley は Blake が *Songs of Experience* (1795) でそうしたように、原罪よりも社会悪の犠牲者としての子供の姿に注目しているのである。実際煙突掃除の Tom とは Blake の *Songs of Innocence* (1789) に収録された詩 ‘The Chimney Sweeper’ の登場人物のひとりである。Blake の Tom が夢の中で天使に自由を与えられ野原を駆け回るのに対して、Kingsley の Tom は夢ではなく水の精に導かれ冷水を泳ぎ回る。また Blake は *Songs of Experience* の ‘The Chimney Sweeper’ において煙突掃除少年の悲しみを謳っている。

Valentine Cunningham はこの作品において Kingsley が「周辺」即ち社会の犠牲者としての主人公らがいる場所を「不浄な場であると同時に潜在的に清浄な、救済され得る場所」と

して描いていることを指摘している<sup>15</sup>。実際 Kingsley は 1859 年頃から衛生学の研究に専心し、人間の罪や貧困の避けられない結果としての病気や汚染から人々とその住環境を救済する方法を考案していたという<sup>16</sup>。但し Cunningham も言うように彼の社会改良に対する視点はあくまでも中産階級的なそれに過ぎなかったが<sup>17</sup>。Arnold Toynbee や Maurice と並んで Kingsley にも影響を受けた社会改良家・宗教家賀川豊彦 (1888–1960) は自伝的小説『死線を越えて』(1920) の中で、神戸の貧民窟を救済するためにそこに住んで布教、慈善活動を行なう主人公新見栄一の若き日を綴るが、この主人公の内面にも貧民窟での生活に馴染んだ頃になってもなおその不浄な世界に対しての一抹の嫌悪感が残っている<sup>18</sup>。Kingsley と賀川のいずれにおいてもこの種の不浄さは資本主義・産業主義の犠牲者として最底辺の労働者に押しつけられたものであり、その環境にいる人々の本来の姿ではないという確信が社会改良への原動力となっていることが共通しているが、むしろその不浄さを嫌悪する自分に内在する原罪としての傲慢を自覚している点において、賀川は精神的な師である Kingsley を越えていると言えよう。Kingsley は「危険な」存在である労働者階級に対しての嫌悪と軽蔑を自覚している<sup>19</sup> が、そのことに対する罪悪感があまり見られない。このような意味で Kingsley には常にヴィクトリア時代の中産階級に特有の偽善性が見受けられるが、現代の読者はこれをこの作者の限界と考えるよりは作者が結果的に身をもって示した問題提起と考える方がよい。

Manlove は Kingsley と MacDonald の両者が「裁く神よりも愛を与える神を強調していて、その愛は痛みを伴って経験される」という事実を指摘している<sup>20</sup>。このことは上で触れたとおり Kingsley が原罪よりも社会悪に関心があり、しかもその加害者の告発よりも被害者の救済の方により関心があるためであろう。勿論 Kingsley が原罪というテーマを扱うことに無関心だというわけではない。水の子になった Tom が小さな水中生物を虐める件で語り手は、「(弱者を虐めることは) 本能であり、そのことが我々人間が元来肉食獣を祖先に持つことの証拠だという人たちもいる。しかしそれが本能であろうとなかろうと、子供たちはそれに耐えることができる。耐えなければならない」と述べている (91)。このような人間が生来持つ残虐性、破壊力は明らかに原罪の一側面であるが、この文脈ではむしろ後半の説教の部分に語り手の主な関心があるという印象を禁じ得ない。Tom が水中生物を虐めなくなるのは、虐めたことによって彼らが Tom を避けるようになり孤独を感じたこと (91–92) と、自分の行ないを恥じて罪悪感に苦しむようになったこと (93) による。ここで Tom が経験している内面的な「痛み」は C. S. Lewis (1898–1963) が言う「神のメガフォンとしての痛み」<sup>21</sup>に通じる。この痛みを通して Tom は自分の罪を認識しているのであり、この意味において彼の外面的汚れを洗い流す冷水と同じ機能を彼の内面で果たしていると言えよう。

親方 Grimes もまた鮭を密漁している所を Harthover 邸の番人に発見され争っているうちに川に転落して溺死する (131-33)。この事件は9月のある夜のことであり、既に水は相当に冷たいはずである。しかしながらこの男の罪は冷水をもってしても清めることができず、Tom の心配をよそに彼が水の子になることはなかった。彼の罪は冷水で浄化できるレヴェルを遙かに越えていたため、「どこにもない国の向こう側の外れ」(the Other-end-of-Nowhere) の刑務所で煙突に閉じこめられるという「煉獄」を経験することになる (315-18)。最終章で Tom はこの状態の Grimes に再会するが、悪態をつき反省の色が見られない彼は母親の死を知らされて流した涙によって身体の汚れが洗い流され、彼を閉じこめていた煉瓦煙突の漆喰が崩れ、彼は煉獄から解放される (318-320)。この場面で Grimes は再び子供に戻って Vendale の美しい風景を見たいと切望するが、ここでは幼年時代と田園風景が通底するものとして示され、それが社会悪の中で墮落した大人の世界、都市の「周辺」の不浄な風景と対象をなしているのである。またこの人物の罪を最終的に清めているのは涙という彼自身の内面から生じたものであるという事実も重要である。痛みとしての水の冷たさは「神のメガフォン」に過ぎず、それを通して贖罪への道を選択するか否かは人間の自由意志によるのである。

物語結末に添えられた「教訓」で語り手はイモリが「退化した水の子」と述べ、この水中生物が冷水で洗われやがて自分の怠惰さを恥じるようになれば長い年月ののちに再び水の子に、それから陸の子、そして大人に「進化」と言っている (328-330)。ここで語り手は聞き手である自分の息子に向かって、「自分自身を洗うための冷水が豊富にあることを神に感謝せよ」と語っている。中世の道徳劇 *Everyman* で主人公「万人」(Everyman) は「告白」(Confession) から「贖罪の痛み」(penance) という名前の宝石を贈られ、それを身につけ痛みを耐えることによってやがて神からの許しが与えられる。ここでは日々の痛みの経験が精神的な巡礼の過程、即ち魂の浄化となるということを寓話的に表現しているのである。*The Water-Babies* における冷水の機能はこの道徳劇における宝石の機能と同じであろう。Tom もまた陰惨な状況に置かれた結果とはいえ屈折した自分の内面を示す自分の外面的な汚れを恥(即ち内面的痛み)として認識したことをきっかけとして、さらなる痛みとしての冷水で浄化され水の子に「進化」する結果となったのである。

### 3. 信仰と科学の止揚

ファンタジーとは読者の「信仰」によって成立する文学である。物語の中の「非現実」を読者が少なくとも作品の内側で「信じる」ことがなければ、この種の文学は意味を持ち得ない。ファンタジーはリアリズム小説より遙かに高次元の「疑惑の自発的一時停止」を要

求する。しかしながら *The Water-Babies* に関する限り、通常の小説と比べてそれほど高度な「信仰」を特に必要としない。何故なら語り手が非現実を悉く合理的に説明しようとするからである。このような語り手の姿勢に既に信仰と科学を折り合わせようとする作者の涙ぐましい努力が見受けられよう。

Manlove は Darwin によって引き起こされた当時の人々の不安に対処することを *The Water-Babies* の目的の一つとして指摘している<sup>22</sup>。ここでこの批評家が言っているように、Kingsley は「魂の進化」(spiritual evolution) という理論を作り上げ、それをこの作品によって物語化している。MacDonald も ‘*The Golden Key*’ (1867) においてこの理論の物語化を試みているが、それは魂が現世での行ないによって進化、或いは退化を続け、生物の外見はその生物が到達している魂の状態を表すということである。*The Water-Babies* では語り手が「カタツムリが殻を作るように、魂は肉体を作る」と述べている (86)。一方で Carpenter はこの主張が物語中で深くは追求されていない、即ち登場人物達の外観にその内面が反映されていないと指摘している<sup>23</sup>。しかしながら美しい姿をした高貴な鮭の紳士的な態度 (122–24)、その鮭のうち怠惰だった者たちが退化した「醜い」鱒 (124–25)、人間の罪に対する罰を与える厳格な「応報夫人」(Mrs Bedonebyasyoudid) の恐ろし気によく見ると穏やかな顔 (193–93, 197)、その妹「善行夫人」(Mrs Doasyouwouldbedoneby) の美しい顔 (203)、或いは菓子を盗んだ Tom の体に棘が生える件 (217) など、外見が内面、魂の反映である例は物語中にいくつか示されている。美しい姿のカワウソが残酷に Tom に襲いかかること (104–5) と醜い姿をした鯨の王様が礼儀正しい紳士であること (246) などいくつかの例外が見受けられるものの、Kingsley のこの主張が作品中で追求されていないわけではない。

Darwin 的進化論とキリスト教的モラルの止揚という点で物語中最も重要なエピソードの一つは「出来合島」(the land of Readymade) に住む「放蕩族」(the Doasyoulikes) の進化と退化の物語 (229–239) である。応報夫人はこの種族の記録写真 (夫人は大昔にカラー写真を発明したことになっている) を Tom と Ellie に見せるが、気候と食物に恵まれたこの島で彼らは平和で怠惰な生活を送っていた。火山の噴火によって大勢が犠牲になり、3分の1ほどが生き残る。しかしながら自然の恵みはもはやなく、怠惰である上に食糧を探し求めなければならず、ゆとりがなくなり見た目にも野蛮人と化す。500年後には島にライオンが繁殖し、木の上に逃げられるだけの筋力を持った者だけが生き残り、子孫を増やす。その後さらに数が減り、手足の指が器用な者だけが子孫を残した。さらに後には体毛の濃い雄が雌によって選ばれ子をもうけることによって世代を追う毎により体毛が濃くなり、ついには直立できなくなり猿へと退化し、その500年後には絶滅する。ここでは彼らの内面の獣性が顕著になるに従ってその外見も獣的になって行くという点で Kingsley の理論を表現し

ているのみならず、Darwinが指摘した性淘汰による変移の過程が極めて明確に物語化されているのである。

この作品はまた環境と進化との関係についても言及している。Harthover 邸から逃げ出したTomの流した汗が彼の体の煤煙を洗い落とし、それが地面を黒くしたことからこの一帯で後にクロゴキブリが多く見られるようになったという件(50)がそれである。それまでこの地方に生息していたのは「空色の上着に赤いズボンの」ゴキブリだったという。Darwinは環境に最も適応した個体が生存し子孫を増やすことによってより環境に適した種へと進化すると説明しているが、この箇所ではKingsleyが挙げている例は後に20世紀になってから生物学者J. B. S. Haldane (1892-1964)が指摘したイングランド中部地方における蛾の変種の事例と一致している。Haldaneが指摘したのはヨーロッパ全域に見られるオオシモフリエダシャク(peppered moth)の白いタイプと黒いタイプのうち、19世紀後半以降イングランド中部では工場の煤煙によって建物の壁が黒くなったことから、それまで少数派であった黒が数の上で圧倒的に優勢になったということである。また最近では工場排気が規制されたため再び白が増えていることが指摘されているが、このことによって再びHaldaneの説が裏付けられたと言えよう。おそらくはKingsleyの筆の勢いで書かれたこの箇所は偶然にも、Haldaneの科学的発見を予言していたことになる。

*The Water-Babies*はBeerの言葉を借りれば「残虐性と美に満ちた世界に宗教的意味を保持する方法を探求」した作品であり、「その方法を進化論が前提とした新たに証明した「変移」(transformation)という考えを通して発見」している<sup>24</sup>。Kingsleyは例えば水の自浄作用や毎年春に繰り返される森羅万象の「再生」などの自然界における「奇跡」を神の仕事として示すことによって、自然科学の影響で弱体化した信仰を自然科学の体系と和解させ、また神の存在そのものを「合理化」しているのである。作品の細部は荒削りでその完成度は極めて低いものかも知れないが、この作品は少なくともこの試みのある程度成功させていると考えて良からう。語り手によって度々繰り返されるアイルランド人に対する愛憎入り乱れた偏見に代表されるように、この物語に人種、階級、或いは特定の職業に対する作者の偏見が多く含まれていることは否定できない。それに加えて語り手の度重なる物語への介入など多くの欠点にも関わらずこの作品が児童文学史の上で独自の地位を保持している理由も、このような形で信仰と科学を止揚させていることに対する評価なのである。

#### 4. 結 論

この作品は一見したところ外向的、社会的、能動的な作品であり、Manloveが指摘してい



るとおり特に MacDonald の作品と比較したときにこの特徴が顕著となる<sup>25</sup>。Kingsley と MacDonald は光と闇、動と静、生と死といったコントラストをなすと言えよう。しかしながらこの作品にも内省的、退行的要素が見られ、それは「歴史的危機」と言われる時代の優れたファンタジー文学に共有される特質でもある。社会改良を志向しながらも Kingsley は革命に対しては常に否定的見解を示しており、チャーティスト運動にも異論を唱えていたという<sup>26</sup>。彼が提唱したのは Carpenter の表現を借りれば「自己の魂を改革し、後はすべてを神に委ねる」ことであった<sup>27</sup>。Tom に対する「救済」もまた社会構造の矯正ではなく痛みとしての冷水による浄化という、外面的な汚れの洗浄によって暗示される内面の浄化である。確かに Kingsley は衛生学を研究し、貧民窟の「救済」を実践しようとしていたが、物理的な汚れは「周辺」に押しつけられた社会の矛盾を象徴するもの、さらに言えば被支配者たちに投影された人間の原罪、その中でも特に産業主義の非人間性という形で顕在化した人間の欲望の醜悪さであると考え、それに対する根源的な救済として *The Water-Babies* で示したような精神的改革を提唱するようになったのであろう。但し社会の周辺の不浄さをこのようなメタファーとして解説した場合、語り手の視点は被害者としての Tom の汚れと社会構造の被害者であり Tom たち児童労働者に対する加害者である Grimes の汚れを同一視している印象が否定できない。これは即ち犠牲者としての子供を救済したいという社会改良家 Kingsley の善意的視点と、労働者階級に対する嫌悪、偏見を否定できない専門職階級の代表としての Kingsley の偽善的視点が入り乱れている結果であろう。

歴史的危機における時代の方向性喪失の不安は未来ではなく過去を志向することに反映される。進化論によって伝統的信仰の体系が揺らいだ 1860 年代の不安、またキリスト教社会主義の限界に気づいた Kingsley 自身の精神的不安定さが *The Water-Babies* においても過去との連続性の探求という形で現れている。この作品の中に示されている児童観がそれを裏付けていると言えよう。語り手は「幼児は一緒にいるのにこの世で最もよい相手であり、最も楽しい遊び相手である。少なくとも世界中の賢者がそのように信じている」と語っている (204)。また Tom の正しいものを見抜く能力について語り手は、「(この能力は) 幼子でなければ持つことができない。水の子であれ陸の子であれ空の子であれ同じことだ。幼子であり続けるなら。」と述べている (298-99)。ここでは新約聖書にあるとおり幼子の魂を持ち続けることが神の国に迎え入れられるための条件と考え、幼児の精神状態を一つの理想と見なす児童観が示されている。社会悪によって汚されなければ子供の本来の姿は(即ち内面は)美しいものであるという見解が読みとれよう。またこの作品に見られる経験主義的世界観も、過去を志向するという意味で子供を理想として描く児童観に通底する。「どこにもない国の反対側の外れ」を目指して旅を続ける Tom に対して海の生命を司る女神 Mother Carey は、プロメテウスとエピメテウスの物語を例に、常に後ろを見つめながら前

に進むことの重要性を解いている (274-78)。未来に向かうためには過去の経験の方が未来を予言することよりも意義があるということを彼女はTomに教えているのである。

Kingsleyは*The Water-Babies*においてむしろ進化よりも退化に注目することによって進化論とキリスト教的モラルを結びつけている。既に引用したとおり放蕩族の歴史や鮭から鱒への退化、或いはイモリになった水の子の物語によって、七つの大罪の一つである怠惰を戒め勤勉を説いている。Darwinにおいて進化は環境への適応、性淘汰によるものであったが、Kingsleyでは魂の状態が進化、或いは退化の決定的要因となる。Darwin進化論では従って進化と倫理は無関係であり、また「Darwinの広告塔」或いは「Darwinの番犬」と言われたT. H. Huxleyによれば進化と倫理はむしろ相反するものである。自然淘汰は結果として他者を排除して自己を保存する過程を説明した理論だからである。それに対してKingsleyの進化論は、魂が外見を形成するという考えを進化と結びつけたところにその独自性がある。

この作品は作者が精神的に病み、しかも小説家として書くべき主題を失っていた時期に不安、絶望の中で書かれたものであった。一方でその当時は進化論によって中心的価値観としての伝統的信仰が揺らぐという不安の時代であった。内面の不安と社会的な不安がKingsleyの中で一致したとき、おそらく彼は書くべきテーマを取り戻したのであろう。さらにこの頃、キリスト教的社会主義の限界を認識し、また社会の「周辺」の者たちの身体や住環境の不浄さが彼らの本来の姿ではなく彼らを抑圧する社会悪の隠喩であるという考えに至ったとき、おそらくこの物語は「靈感によって」出来上がったのであろう。この作品は多くの欠点を抱えながらも、自然界の奇跡を神の業として描くこと、また進化、退化を物語化してしかもキリスト教的モラルと一致させることには成功している。この意味において*The Water-Babies*は、ポスト・ダーウィン時代の児童文学の先駆的存在として、また歴史的危機におけるファンタジーの代表作の一つとして評価できるのである。

#### 註

1. Charles Kingsley, *The Water-Babies* (London: Penguin, 1995)。作品からの引用はこの版の頁数を本文中に ( ) で示す。
2. Humphrey Carpenter, 'Parson Lot Takes a Cold Bath: Charles Kingsley and *The Water-Babies*', in *Secret Gardens: A Study of the Golden Age of Children's Literature* (Boston: Houghton Mifflin, 1985), p. 28.
3. Ibid., pp. 36-37.
4. F. E. Kingsley ed., *Charles Kingsley: His Letters and Memories of His Life* (London: Macmillan, 1899), p. 245.

## 進化と退化の神話—*The Water-Babies* 論

5. 例えば Carpenter, op. cit., p. 38.
6. F. E. Kingsley, op. cit., p. 164.
7. 拙論「通過儀礼としての死—*Alice's Adventures in Wonderland* 論」『文学論叢』第122号（豊橋：愛知大学文学会，2000），pp. 150–164；「‘The Golden Key’ —もうひとつの進化論」『文学論叢』第123号（豊橋：愛知大学文学会，2001），pp. 263–278；「歴史的危機とファンタジー—英国児童文学の黄金時代」『シルフェ』第40号（東京：金星堂，2001），pp. 71–79.
8. Colin Manlove, ‘MacDonald and Kingsley: A Victorian Contrast’, in *The Gold Thread: Essays on George MacDonald* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 1990), p. 150.
9. Gillian Beer, *Darwin’s Plot: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000), p. 128.
10. F. E. Kingsley, op. cit., p. 245.
11. Carpenter, op. cit., p. 40.
12. Ibid., p. 38.
13. Ibid., p. 24.
14. Ibid., p. 37.
15. Valentine Cunningham, ‘Soiled Fairy: *The Water-Babies* in its Time’, in *Essays in Criticism: A Quarterly Journal of Literary Criticism* Vol. XXXV, April 1985 (Oxford and Cambridge: Stephen Wall and Christopher Ricks, 1985), p. 134.
16. F. E. Kingsley, op. cit., pp. 221–222.
17. Cunningham, op. cit., p. 132.
18. 賀川豊彦『死線を越えて』（東京：社会思想社，1983），p. 425.
19. Rosemary Jackson, *Fantasy: The Literature of Subversion* (London: Routledge, 1988), p. 151.
20. Manlove, op. cit., p. 141.
21. C. S. Lewis, *The Problem of Pain* (London: HarperCollins, 1977), p. 76.
22. Manlove, op. cit., p. 150–51.
23. Carpenter, op. cit., p. 41.
24. Beer, op. cit., p. 127.
25. Manlove, op. cit., p. 159.
26. Carpenter, op. cit., p. 32; Jackson, op. cit., p. 151.
27. Carpenter, op. cit., p. 32.